

2021年8月26日(木)

老球の細道627号

コーチを天職と考えている人への一冊

会津バスケットボール協会 室井 富仁

人生の「チェンジ!」は人との出会いばかりでなく、本との出会いもある。今から10年くらい前にジェリー・リンチ著『クリエイティブ・コーチング』(大修館)に出会った。さらに幸運にも大修館からこの本の書評を依頼され、私の拙文が季刊誌『保健体育教室』に掲載された。下記の文章がそれである。コーチを本気で考えている人にはお勧めの一冊。

【アメリカの格言に「ライオンに導かれたシカの軍隊は、シカに導かれたライオンの軍隊を破る」というのがある。スポーツも同じ。有能なコーチに導かれた選手、チームは、スポーツの素晴らしさを知り、自分たちの望むような結果を出す。

私は県内レベルの高校バスケットボールチームを30年以上に渡ってコーチをしている。素晴らしい選手に恵まれても勝たせられない。真面目に努力している選手をも十分に伸ばしきれない。私のチームの選手たちは、まさにシカに導かれたライオンたちのようである。コーチとして毎日悶々としていた中で出会ったのが本書である。

選手を馬車馬のごとく走らせ、ミスには烈火のごとく怒鳴り散らす。選手の都合など考えないで、厳しいだけの練習をコーチのアイデンティティとして自己満足していた。長い間そんなコーチングスタイルをとっていた私にとって、本書の内容は目から鱗どころではなく、全身から鱗が剥がれ落ちた。コーチはどうあるべきか、コーチとしての責任、使命に確かな手ごたえを感じた。

本書の内容は三つの大テーマにまとめられている。「リーダーシップを育む」「掲げた目標へ導く」「競技力をさらに発揮させる」。どのテーマにも実践的で具体的な手立てが盛りだくさん。また、歴史に残る世界的な名コーチ、名プレイヤーの珠玉の名言が随所に散りばめられている。特に、コーチの神様と称された元 UCLA ヘッドコーチ、ジョン・ウッデンの言葉には襟を正せられる。「コーチとしての自分の責務は、選手が人間として持っている可能性を極限まで引き出すことであって、バスケットボールはそれを達成するための『一介のゲーム』にすぎない」。〈中略〉

幕末の思想家、教育家であった吉田松陰は松下村塾を開き、歴史に残る幾多の人材を輩出した。松陰は幽閉生活の中でも、一緒に獄中にいた罪人たちを紳士、淑女として日常的に接し絶大なる尊敬と信頼を得たという。松陰のその人間性が幕末の偉人達を育成した。

人を育てる原点はお互いの信頼と尊敬である。スポーツの選手とコーチの関係も同じである。選手を育てることは人間を育てることであり、人生を教えることである。コーチは人間として尊敬され、信頼できる魅力的な存在として日々成長しなければならない。そうでなければコーチングなどは成立しないと本書は教えてくれる。

【今の自分は停滞気味だ】と感じているコーチにとって、本物のコーチングに再度燃えるための絶好の指南書である。今から30年前に本書に出会わなかったのが悔やまれる】